

令和7年度 第3回豊田市市民活動促進委員会記録

日 時	令和7年12月26日（金） 午後6時30分～午後8時30分
場 所	とよた市民活動センター
出席者	<p>●委員（敬称略、会長・副会長以外50音順） 鬼木利瑛（会長）、有我都（副会長）、秋山聖、伊東浄江、岩田雅子、亀井祥子、鈴木友喬、鈴木 萌芽、谷口功、都築朗、戸田友介、長谷川和哉、三島知斗世 以上12名</p> <p>●事務局 地域交流課 課長兼とよた市民活動センター所長 杉浦 とよた市民活動センター 近藤、大澤</p>
傍聴者	なし
欠席者	なし

議事

（1）前回の振り返り（協議）

事務局説明を行った後に議論を行いました。

A 委員	事務局の発言を受けて、意見等ある方は挙手をいただければと思いますがいかがでしょうか？B 委員お願いします。
B 委員	個人的な感覚ですが、「促進」という言葉には「一方的に行政がさせる」というニュアンスがあるように感じます。行政主導ではなく市民と共に考えるのであれば、「共働推進委員会」のような名称がしっくりくるかもしれません。また、条例上の規定を削除し「任意の会議体」にした場合、どのような位置づけになるのか懸念があります。
C 委員	市民活動が完全に行政の手を離れて自立できるなら理想的ですが、現状はまだ行政による伴走支援が必要です。条例から「指針」へと制度的担保が弱まることで、行政が役割や責任から手を引く（後退する）ように見えてしまうことを危惧しています。また、これまでの「諮問機関」としての重みは重要でした。行政が委員会の一員となることで、第三者としての独立性やチェック機能が失われるのではないかと懸念があります。
事務局	行政が手を引く意図はなく、行政・市民・企業等が対等な立場で「一緒に支援していく」形を目指しています。ただし、条例等の規定がなくなると、将来的に行政の方針転換で支援が縮小されるリスクは否定できません。
D 委員	多様な主体が支援に関わること自体は良いことです。行政が引き続き予算措置や環境づくりに「前のめり」に取り組むことが担保される表現になれば、条例改正自体はポジティブに捉えてよいのではないのでしょうか。
E 委員	条例を変えるかどうかにかかわらずとも、対等に議論し創造する

	<p>ことは可能です。ただし、行政の支援が後退するような印象は避けるべきです。単に意見を言う場ではなく、行政内部からは見えない課題を行政とつなぎ、事業をデザインしていくような場であるべきです。</p>
C 委員	<p>本委員会が行政の諮問機関であることの意義は非常に大きいと考えます。市長からの諮問に対し、市民活動にとって有益か否かを審議し答申するというプロセスには、最終的な判断は市長にあるとしても、一定の重みがありました。今回の改正により、計画策定ごとの諮問・答申という流れがなくなり、行政自体も委員会の一員（メンバーシップ）に内包されることとなります。これにより、行政の役割や責任の所在が曖昧になる懸念があります。現在の事務局（センター職員）に「行政として後退するつもりはない」という強い意思があることは十分に理解していますが、担当者が交代した際にもその姿勢が維持されるかという点には不安が残ります。これまで委員会が担保してきた独立性や役割が、制度的な裏付けを失うことで揺らいでしまう恐れがあります。昨今、行政担当者等が変われば方針も変わるという風潮が見受けられますが、地方自治の本旨に照らせば、行政としての一貫した姿勢は保たれるべきです。議事録に法的拘束力はありませんが、この懸念は記録に残しておきたいと思います。制度が変わる以上、委員会自身がこれまで以上に独立性や確固たる方針を持たなければ、組織としての存在意義が希薄化しかねないという危機感を持っています。その意味で、市民側の姿勢も問われていると言えます。</p>
A 委員	<p>ありがとうございます。C 委員には、昨年の議論から一貫して「指針化」に伴う行政の責務についてご意見をいただいております。その上で今回のチャレンジが進められていると認識しています。ご指摘の通り、議事録の拘束力や担当者変更による不安定さを払拭するためには、委員となる私たちが、選任された段階から強い当事者意識を持って運営にあたる気概が必要になると改めて感じました。そもそも「計画」から「指針」へ移行する背景には、単に計画の進捗（できた・できない）を確認するだけの場ではなく、現場を持つ多様な主体が集まるこの場の意義を活かす意図があります。改正後の要綱にあるように、企業や団体など多様な関係者を巻き込み、委員会自体が主体的に動けるようにするために、今回の条例改正と指針化が進められているのだと理解しています。</p>
事務局	<p>委員会の名称が適切かどうかは検討の余地がありますが、機能の転換について説明します。現在は市の施策に対して意見や答申を行う「諮問機関」としての性格が強いですが、今後は市民活動の促進について共に考え、持ち寄り、調整して一緒に実践していく</p>

	<p>期間へと転換することをイメージしています。行政がこれまで担ってきた役割を放棄するわけではなく、行政以外にも市民活動を支援・促進する主体が増えている現状を踏まえ、それらが集まる場としたいと考えています。これまでは行政が「輪の外」にいて意見を聞く形でしたが、今後は行政も「輪の中」に入り、対等な立場で議論し、批判も受けながら共に考えていく姿勢です。</p>
A 委員	<p>ありがとうございます。行政が「輪の中に入る」ということは、先ほど C 委員が懸念されていた「行政が手を引くわけではない」という点に対する回答にもなっていると理解しました。</p>
E 委員	<p>改正案第 8 条にある「事業の総合調整を図り」という記述について確認です。これは市全体の事業ではなく、あくまで「市民活動の促進に関わる事業」を指すという理解でよいでしょうか。また、本当に対等な立場で共働していくためには、年数回の会議だけでは不十分だと感じます。必要に応じて外部の人材を招いたり、プロジェクトチームを組成したりして動かしていく必要がありますが、そうした進め方自体も、この委員会で決定できるという理解でよいでしょうか。</p>
事務局	<p>その通りです。理想としては、委員会の下にチームを作るなどして動いていくことが望ましいと考えています。条例であまり細かく規定しすぎると柔軟性を欠くため、あくまで促進委員会での協議に基づき、必要に応じてプロジェクトチームや実行委員会を設置できるような、柔軟な運用が可能な仕組みとしています。</p>
D 委員	<p>文言について、「市民活動の促進を支援するため」と記述するのと、「市民活動の促進をするため」とするのでは、意味合いに違いは生じるのでしょうか。「促進をするため」とした方が、意図に近いのではないかと感じました。</p>
事務局	<p>ご指摘の通りです。言葉の使い分けについて明確な意図があったわけではないため、再考の余地があります。一度持ち帰り、検討させていただきます。</p>
F 委員	<p>改正案の主語が「市」になっていますが、変わるのは「市（行政）」なのか、「委員会」なのか、あるいは「関係性」なのか、焦点が少し分かりにくいと感じました。</p>
C 委員	<p>基本的にこれまでの計画は、行政が「市民活動をこのように促進したい」という意図を持って策定し、そこに市民を巻き込んでいくという性質のものでした。しかし、計画を作ること自体が目的化して、一度策定すると 4 年間その内容に縛られてしまうという弱点がありました。特にコロナ禍では、実質的な活動ができない中で計画だけが動いているという乖離が生じ、現行の計画行政の限界が見えてきました。今回、「計画」から「指針」へと転換する</p>

	<p>ことで、縛りを緩め、より柔軟に市民活動を後押ししようという方向性は一つの選択肢として理解できます。しかし、指針になることで行政の関与が後退しないか、どのように行政の責任や意思を担保するのか、という点がぶれないように議論する必要があります。</p>
F 委員	<p>「指針」に対して、皆で力を合わせるというのは言葉で言うほど簡単ではありません。計画のような拘束力がない中で、本当に実行できるのかという懸念もあります。「一緒にやりますよ」と言われてはいますが、結果として市民側の力量も問われることになり、行政もその輪の中に入っているという構成上、責任の所在が曖昧になる恐れも感じています。</p>
A 委員	<p>今の F 委員のご懸念はもっともですが、E 委員がおっしゃったように、だからこそ「年に数回の会議で担保できるのか」も含めて、委員会の中で主体的に決めていく必要があるのだと思います。これはある意味、「市民力」が試されるチャレンジなのだと感じました。</p>
G 委員	<p>改正案にある「事業の総合調整」とは、具体的にどのような議論を行うイメージでしょうか。これまでの計画に対する評価とは異なる議論になるのでしょうか。</p>
B 委員	<p>評価のあり方についてですが、総合計画策定時に市長が「羅針盤」という言葉を使っていたのが印象に残っています。リーマンショックやコロナ禍など、計画通りにいかない事態が起きた際、「計画通りできなかったから評価は×」とするのではなく、方向性（羅針盤）を示して柔軟に修正していくことが重要だという理解です。これまでは「やりました」という報告に対して 5 段階評価をしていましたが、外部要因でできなかったのか、努力不足なのかが分かりづらい側面がありました。今後はそうした事情も含めてどう判断していくのか、疑問に思っています。</p>
E 委員	<p>「評価」についてですが、単に「できた/できない」のアウトプット評価ではなく、「なぜできなかったのか」という要因分析や「何が変わったか」というアウトカム（成果）の視点が必要です。指針という大きな方向性だけでは、評価がお手盛り（甘い評価）になる懸念があります。</p>
事務局	<p>厳密な事業評価というよりは、多様な団体が持ち寄ったプロジェクトを共有・共感し合う場をイメージしています。</p>
D 委員	<p>つまり、これまでのように「行政の計画に対して市民が意見を言う」という機能は一旦横に置き、指針を含めて「みんなで何をするかを話し合う場」にするということでしょうか。行政へのチェック機能がなくなるように聞こえますが。</p>

事務局	少し違います。行政がやることも全体の中に含まれます。行政は「こんな支援メニューを考えた」と提示し、それに対して委員会の中で意見をもらい、評価を受けることになります。行政の施策については、その場で「それはダメだ」「良い」といった評価がなされると考えています。
C 委員	「共感し合う評価」は理解しますが、委員会の中に行政もメンバーとして入っている場合、行政が管轄する事業を、行政自身が含まれる委員会が評価することになります。これは「お手盛り」や「利益相反」と見なされる恐れがあり、評価の正当性が危うくなるのではないのでしょうか。第三者評価の視点を別途設ける必要があるかもしれません。
H 委員	C 委員と同意見です。「促進する側の行政」と「活動する側の市民」の立場の違いが曖昧になってしまう印象を受けます。
A 委員	「一緒に盛り上げよう」というポジティブな前提は理解していますが、うまくいかない場面も想定すると、指摘されたような矛盾点を突かれる可能性があります。制度として矛盾がないよう、しっかり詰めておく必要がありますね。
D 委員	お互いに評価し合うというのは非常に難しいものです。批判し合うことになりかねず、関係性が萎縮してしまう恐れもあります。
C 委員	もし評価を厳格に行うのであれば、D 委員がおっしゃるように、委員会とは別に完全な「第三者評価機関」を設けるべきです。会計士や外部の専門家が、資金の使い方や支援内容が適切だったかを客観的に評価する仕組みがあってこそ、この制度は生きてくると思います。
事務局	ご指摘の点は重く受け止めさせていただきます。評価のあり方や第三者性の担保については、持ち帰って検討いたします。

（２）議論 目指す姿の決定

A 委員	先程の事務局からの説明を踏まえて、前回の委員会からの議論を経て、皆さんのファーストインプレッションを順に伺ってみたいと思います。
I 委員	直感ですが、「楽しいから始めよう」が良いです。これから活動を始め人にとって、最もハードルが低く、一歩踏み出しやすいと感じました。
D 委員	第一印象では「主人公になれるまち」が良いと思いましたが、「まちの未来を動かそう」も捨てがたいです。
J 委員	私も「主人公」が良いと思いましたが、大きなイメージになりすぎるので、「小さな」や「等身大の」といった言葉が加わると、よりイメージが湧きやすいと思います。

C 委員	私は「響き合うそれぞれの違い」が良いと思います。「主人公」と言うと、逆に「脇役」の存在を意識させてしまう懸念があります。「違い」が排除されず響き合う形が良いと考えます。
K 委員	自分は「参加」よりも「推進・レベルアップ」の視点で考えているため、異質なものがつながり相乗効果を生む「違い」や「共働」が含まれる案に共感します。
L 委員	「楽しい」から始まり、それが育って「まちを動かす」につながるような流れが良いです。足して割ったような、ストーリー性のあるものが理想です。
G 委員	意欲的な人も、自信がない人も、多様な人が関われるという意味で「響き合うそれぞれの違い」が良いと思いました。
F 委員	「市民活動」という言葉とセットで使われるなら良いですが、単体のスローガンとして見るなら、意味が一番伝わりやすいのは「まちの未来を動かそう」だと感じました。
M 委員	入り口を広くするなら「楽しいから始めよう」がベストですが、市民活動の深みとしては少し物足りなさも感じます。楽しさから始まり、つながっていく段階が見えると良いです。
E 委員	「主人公になれる」に「いつでも」という言葉を加えたいです。取り残される人がいないようにしたいという意図です。
H 委員	「活動者を新たに増やす視点」又は「既存の活動者の環境を改善する視点」など、ターゲットをどこに置くかで変わります。
A 委員	スローガンは、その後の「バリュー」や「重点プロジェクト」にも繋がる重要な要素です。支援団体や個人に直感的に響き、盛り上げに繋がるものである必要があります。「楽しさ」「私から始まる」「違いを認め合う」といった要素を含めつつ、目指す姿が一言で伝わるものにする必要があります。

3. スローガンの決定と今後の方向性

会長及び委員全員による議論の結果、個人の「楽しい」という入り口から始まり、つながりを経て、まちの未来へ波及する流れを作ることとしました。また、「共働」という言葉は「共働き」と混同されやすく、堅いイメージもあるため、スローガンにはあえて入れないこととしました。

【スローガン構成案】

「私の楽しいから始まる、人とつながる、まちの未来が動く」

事務局	スローガンだけでなく、それに続くバリュー（行動指針）等の文章については、箇条書きのような形式ではなく、ストーリー性や情感（ポエム的要素）を持たせた、共感を呼ぶ表現になるよう再考して提案します。
-----	--

閉会

（１）議事録確認のお願いをしました。